



National Institutes for the Humanities (NIHU) Project
“ Integrated Area Studies on South Asia (INDAS-South Asia) ”

RINDAS

The Center for South Asian Studies, Ryukoku University

RINDAS Series of Working Papers 35

B. R. アンベードカル “Buddha or Karl Marx” の翻訳

翻訳者：川元恵史・嵩宣也・壬生泰紀

龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター・南アジア研究センター
The Center for South Asian Studies, Ryukoku University



研究テーマ：「南アジアの思想と価値の基層的变化」
Fundamental Changes in Thought and Values in South Asia

1990年代以降、インド社会が大きく変容していることは、多くの研究等により指摘のなされているところである。それは、政治的には民主主義の展開と深化で語られ、また経済的には、市場経済の発展と生活状況の向上、そして負の側面としての格差の拡大でもって捉えられる。社会的には、各種の社会運動の登場と興隆によって立ち、文化宗教的には、多様なアイデンティティの主張が並列的になされう状況をもって表される。こうした変容は、インド、ひいては南アジア社会の思想と価値が、その基層から胎動・変化しているがゆえと捉えられるだろう。

本プロジェクトでは、「南アジアの思想と価値の基層的变化」との統一テーマを設定し、ひとつに、龍谷大学が豊富な研究蓄積を有する、南アジア地域社会における思想の長大な時間軸における系譜的研究から、またひとつに、具体的な状況についての現地調査に基づく価値の基層的变化に関する分析から、研究テーマへの接近を試みる。これら両観点の統合的な考察を行い、現代インド・南アジア社会の基底部分における変容の起点と推進力の解明を目指す。なかでも、現代インド・南アジア社会の変容を代表的に表象する「下層民の台頭」の様相に着目し、思想史との連関から、その背景と論理を探究し、現地調査から、人びとの生活状況や意識、価値の変化についての研究・分析を行っていく。

本研究プロジェクトは、人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」〔第1期（2010～2014年度）、第2期（2015年度）〕の活動と成果を発展的に継承し、「南アジア地域研究」（2016～21年度）として運営・実施されるものである。龍谷大学は国内6拠点のひとつとして、京都大学（中心拠点）、国立民族学博物館（副中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学との連携・共同により、ネットワーク型地域研究として研究を展開・推進している。

拠点代表：嵩満也

RINDAS Series of Working Papers 35

B. R. アンベードカル “Buddha or Karl Marx” の翻訳

翻訳者：川元恵史・嵩宣也・壬生泰紀

はじめに

本成果物は、人間文化研究機構（NIHU）プロジェクト「南アジア地域研究」（INDAS）の龍谷大学拠点（RINDAS）において、2010年度から2021年度にわたっておこなわれた「アンベードカル研究会」の成果の一部である。本研究会では発足当初より、仏教学を専門とする若手研究者を中心に B. R. アンベードカルの著作および関連文献を読み進めてきた。この度翻訳した“Buddha or Karl Marx”は2019年度に当研究会で取り上げたものである。下訳は当年度に済ませ、その後は関連する文献を読み進めていった。そして本年度はその成果を公表することを目標とし、翻訳の見直しや解題・補注の加筆をおこない、刊行するにいたった。RINDASでは中心テーマとして「南アジアの思想と価値の基層的变化」を掲げ、南アジア地域の思想と価値、ならびに社会変容に関する研究を推進してきた。その中でも、特にインド社会における「下層民の台頭」に着目した研究を当研究会ではおこなってきた。龍谷大学は100年以上も前から近代的なインド学・仏教学の研鑽が積み重ねられてきた教育機関である。この特色を活かし、研究会では下層民の台頭の中心人物であるアンベードカルの思想をインド思想史あるいは仏教思想史に位置づけることを目標のひとつとしてきた。本成果物もまたその延長線上にある。

本成果物に収録されている「解題」や「補注」では、“Buddha or Karl Marx”に見られるアンベードカルの仏教理解や仏典引用の態度について言及した。また仏教を中心に用語の解説や引用仏典の紹介をおこなった。RINDASを含む人間文化研究機構「南アジア地域研究推進事業」は本年度で終了するが、龍谷大学では、今後も以上の特色を活かしたアンベードカル研究を進めていく予定である。

本成果物の刊行にあたっては、アンベードカル研究会のメンバーである RINDAS 研究協力者の川元恵史、嵩宣也、壬生泰紀が中心となって作業をおこなった。“Buddha or Karl Marx”のイントロダクションとI～IVは嵩が、V～VIは壬生が、VII～VIIIは川元が下訳を担当した。そして翻訳の統合や訳語の統一などは壬生が、「解題」「補注」は川元と嵩が担当した。なお校正にあたっては RINDAS 兼任研究員で当研究会メンバーの内田准心氏（龍谷大学講師）にお願いした。

アンベードカル研究会を通して、長きにわたって多くの先生方にお世話になった。現在の RINDAS センター長の嵩満也先生（龍谷大学教授）をはじめ、前センター長の長崎暢子（東京大学名誉教授）、中村尚司（龍谷大学名誉教授）、佐藤智水（龍谷大学客員教授）の諸先生方より懇切丁寧なご指導を賜った。また歴代の RINDAS 研究員の志賀美和子（専修大学教授）、舟橋健太（龍谷大学准教授）、井田克征（中央大学准教授）、山崎浩平（RINDAS 研究員）の諸先生方には、貴重なご助言をいただいただけでなく、研究会のとりまとめでもお世話をおかけした。この場をお借りして心より御礼申し上げる。

2022年2月8日 壬生泰紀

目次

はじめに.....	i
解題.....	1
凡例.....	7
《翻訳》ブッダかカール・マルクスか.....	9
補注 ——用語解説と引用仏典紹介——.....	29

解題

【書誌情報】

今回の翻訳の定本となる“Buddha or Karl Marx”は、Babasaheb Ambedkar, “Buddha or Karl Marx,” in Vasant Moon and Hari Narake (eds.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writings and Speeches* Vol. 3, 1987 (2014) に収録されているものである。制作された年次はわかっていない。本書のイントロダクションによると、B. R. アンベードカル (Bhimrao Ramji Ambedkar, 1891-1956) の信奉者の間では、アンベードカルに“The Buddha and Karl Marx”という書物があると信じられていたが、遺された原稿に一致する、その題のものは見つからなかった。代わりに“Buddha or Karl Marx”と題した34ページの短いエッセイが見つかり、それを本書に収録したという¹。

アンベードカルの著述の中で、この“Buddha or Karl Marx”と類似したタイトル・内容のものとして、“Buddhism and Communism”と、“India and Communism”とがある。

前者の“Buddhism and Communism”は、D. C. アヒール (Ahir) の *Selected Speeches of Dr. B. R. Ambedkar 1927-1956* (1997)² に収録されており、1956年11月20日にカトマンズで開催された第4回世界仏教徒連盟 (World Fellowship of Buddhists: WFB) でのアンベードカルの講演をまとめたものである。アンベードカルはこの半月後の12月6日に亡くなっており、最晩年の講演といえる。全集収録の“Buddha or Karl Marx”と比較すると、内容や構成はよく似ている。“Buddha or Karl Marx”の方が仏典の引用も多く専門的で複雑な内容になっているが、これはエッセイと講演という性質の違いから来るものであろう。

後者の“India and Communism”は、未完成のものである。アンベードカルの手による3部8章構成をイメージした目次は残っているが、実際に書かれたのは第2部第4章“The Hindu Social Order”の一部であった³。

【内容紹介】

“Buddha or Karl Marx”の内容を確認してみよう。このエッセイには次のような見出しがつけられている。

1. ブッダの信条 (I THE CREED OF THE BUDDHA)
2. カール・マルクスのオリジナルな信条 (II THE ORIGINAL CREED OF KARL MARX)
3. マルクス主義の信条で生き残ったものは何か? (III WHAT SURVIVES OF THE MARXIAN CREED)
4. ブッダとカール・マルクスの比較 (IV COMPARISON BETWEEN BUDDHA AND KARL MARX)
5. 手段 (V THE MEANS)
6. 手段の評価 (VI EVALUATION OF MEANS)

7. 誰の手段がより効果的か (VII WHOSE MEANS ARE MORE EFFICACIOUS)

8. 国家の衰退 (VIII WITHERING AWAY OF THE STATE)

アンベードカルは、平等性や私有財産の廃止⁴など、ブッダとマルクスに共通する考え方を紹介し、両者をとともに高く評価している。問題となるのはその達成手段であり、両者はそこにおいて、鋭く対立する。アンベードカルによれば、マルクス主義の達成手段は「暴力」と「プロレタリアート独裁」である。アンベードカル自身、「暴力」を完全に排斥してはいないが、それを必須の手段と考えているわけではない。また「独裁」については、自由が制限されるため、許容できないとしている。

その点で仏教は、同じ目標を掲げながら、達成手段がまったく異なっているとアンベードカルは主張する。ブッダは彼のダルマを絶え間なく説くことによって、暴力や強制ではなく、自発的に人々が心を変えるように働きかけたという。

【アンベードカルによる仏典引用】

アンベードカルはこの論の中で仏典をいくつか引用している。引用元は明記されていないが、その多くは、リス・デイヴィッツ (Thomas William Rhys Davids, 1843-1922) による仏典の英訳、*Dialogues of the Buddha* からのものである。文章の一致や引用箇所へ唐突に登場する番号からも、それは明らかである。“Buddha or Karl Marx” には、引用元の *Dialogues of the Buddha* 内のチャプター番号がそのまま記されている箇所が、いくつもある。

そうした引用において注目されるのが、アンベードカルがリス・デイヴィッツの訳語を意図的に改変したと思われる箇所である。本論「4. ブッダとカール・マルクスの比較」内の仏典の引用中に、いわゆる四聖諦が登場する。*Dialogues of the Buddha* の当該箇所において、リス・デイヴィッツは「苦」(dukkha) を “pain” と訳しているが、アンベードカルの引用では、それが経済的困窮をも含意する “misery” の語に置き換えられているのである。「苦」の意味が少しづらされることにより、この四聖諦の文脈は、ブッダが経済的困窮を含めた「苦」の問題に立ち向かい、それを解決する思想を提示したという意味になる。

これが偶然ではなく意図的だということには理由がある。アンベードカルは最晩年の講演の “Buddhism and Communism” において、仏教における “dukkha” について、自身の解釈を述べている。仏教の歴史の中で、“dukkha” という言葉は様々に捉えられ、再生や輪廻、それらが “dukkha” だと解釈されてきた。しかしアンベードカルはそれには同意できないという。アンベードカルによれば、ブッダが「貧困」の意味で “dukkha” という言葉を使っている箇所が仏教文献の中にはたくさんある。そのため立脚点において、ブッダとマルクスに異なりはないというのである⁵。この講演では、アンベードカルはより直接的に経済的困窮を指す “poverty” の語を使用している。

仏教において、「苦」は人間が解決しなければならない最大の問題とされるが、アンベードカルはそれを自分たちの喫緊の課題であった「貧困」に重ねて、定義し直していたことがわかる。アンベードカルが不可触民の地位向上のために経済的問題に強い関心を寄せていたことはよく知られているが、仏典の引用にもそうした意識が反映されているといえるだろう。

【インドにおける仏教と共産主義】

インドにおいて仏教とマルクス主義というテーマを考える際に、欠かすことのできない重要な人物がいる。それは、ダルマーナンド・コーサンビー (Dharmanand Kosambi, 1876-1947) と、ラーフル・サンクリティヤーヤン (Rahul Sankrityayan, 1893-1963) とである。コーサンビーはアンベードカルよりも 15 歳年長で、サンクリティヤーヤンはアンベードカルとはほぼ同年代である。2 人の事績は、ダグラス・フェアチャイルド・オバー (Douglas Fairchild Ober) の *Reinventing Buddhism: Conversations and Encounters in Modern India, 1839-1956* の第 8 章に詳しい。

コーサンビーとサンクリティヤーヤンは多くの共通項を有する。ともにバラモンの家に生まれるが、マハーボーディソサイエティ (Maha Bodhi Society) などの仏教系ネットワークとの関わりを経て、仏教僧となる。その後マルクス主義と出会い、何らかの形で仏教とマルクス主義とを融合させようとした点も同じである。

特にコーサンビーはアンベードカルと直接の親交があり、本論にとってより重要である。コーサンビーはそのサンスクリット語のスキルが評価され、1910 年にハーバード大学に招かれる。当時のアメリカは社会主義の隆盛期であった。コーサンビーは社会主義者を観察するうちに、彼らの考えと、自分がよく知る仏教の考え方との間に、大きく 2 つの類似点があることに気づいた。第 1 に、社会主義者が集団的意思決定を重視することは、サンガの運営方針である集団的意思決定の重視と似ており、第 2 に、財産の国有化を求める社会主義者の主張は、個人の財産所有を禁止するサンガの規則に似ていた⁶。

コーサンビーはロシアで働いた時期もあったが、ヨシフ・スターリン (Iosif Vissarionovich Stalin, 1878-1953) による粛清を目の当たりにし、失望して帰国する。マルクス主義の暴力性を嫌うコーサンビーは、独自の戦略を立てた。それは、ブッダの非暴力とマルクス主義の社会経済改革の知恵、そしてマハトマ・ガンディー (Mahatma Gandhi, 1869-1948) によるサティヤグラハの戦術を融合させたものであった⁷。それによって、ロシアでは達成されなかった、流血のない革命が成し遂げられるとコーサンビーは考えた。

先に触れた通り、コーサンビーは 1935 年にアンベードカルと会っており、2 人の間には親交がある。“Buddha or Karl Marx” は、「カール・マルクスとブッダを比較することは、冗談のようにみなされるかもしれない」という言葉で始まっているが、アンベードカルはすでにそれを試みた先輩をよく知っていたことになる。

アンベードカルは、仏教の文脈にマルクス主義の理論を読み込むようなコーサンビーの言説を熟知していたであろう。実際、アンベードカルは“Buddha or Karl Marx”において、サンガの民主主義的構造を称賛し（逆に独裁は批判される）、またブッダとマルクスが共に私有財産の有害性を説いたと主張しているが、これらはまさにコーサンビーが発見した「2つの類似点」に対応するものである。

このようにアンベードカルがコーサンビーと思想の枠組みの共通性を持つことは明らかだが、アンベードカルはコーサンビーのように仏教とマルクス主義を融合させようとはせず、“Buddha or Karl Marx”のタイトルにも表れているように、二者択一を迫るような物言いをしている。これについては、アンベードカルと共産主義との関係、より適切に言えば、アンベードカルとインドの共産主義者との関係を考慮しなければならない。アナンド・テルタムデ (Anand Teltumbde) の論述に基づき、この問題を考えてみよう。

【アンベードカルと共産主義】

“Buddha or Karl Marx”の論説を見てもわかる通り、アンベードカルはマルクスの考え方に一定の理解を示している。また1938年1月のムンバイでのコーティ（Khoti）制度（一種の農奴制）廃止を訴える大規模な農民デモや、1939年のスト禁止を目的とする争議法案に反対し、10万人の労働者によるストライキを組織した時のように、一時的に共産主義グループと共闘することもあった⁸。しかしアンベードカルは基本的にはインドの共産主義者とは距離をとり、むしろ彼らを批判したり、また逆に彼らに批判されたりすることの方が多かった。

アンベードカルと共産主義者が対立した要因はいくつかある。ここでは、カースト認識の相違と政治的要因の2つに触れておきたい。

インドの共産主義者は、カーストの問題を文化の問題、つまりいわゆる「上部構造」の問題と受けとめ、「下部構造」たる経済的基盤が改善されれば自動的に解決すると考えていた。そのためアンベードカルが主導する反カースト運動を冷ややかな目で見ていた⁹。アンベードカルは1936年の「カーストの絶滅（The Annihilation of Caste）」の中で、そうした「インドの社会主義者たち〔実際には共産主義者—引用者注〕¹⁰」の認識を批判している。アンベードカルは、彼らがヨーロッパの認識・解釈をそのままインドに当てはめようとしており、「インドに独特な社会構造に発する諸問題」、つまりカーストに関わる問題を考慮していないのではないかと疑問を投げかけている。テルタムデは、インドの共産主義者がカーストの問題に無頓着であった具体例を紹介しているが、彼らがヨーロッパ由来のカテゴリーや概念を教条的にインドに植え付けようとした理由について、興味深い推察をおこなっている。こうした態度は、バラモン教的文化である「文字に対するピューリタンの忠実さ」に起因するというのである。マルクス主義を準宗教と勘違いし、マルクスの言葉をヴェーダの言葉のように揺るぎなく守ろうとしたために、ヨーロッパとインドという環境の違いへの配慮が起こらなかったのだろうと述べている¹¹。

アンベードカルと共産主義者との対立のもうひとつの理由は、政治的なものである。アンベードカルは1936年に「独立労働党（Independent Labour Party: ILP）」、1942年に「指定カースト連合（Scheduled Castes Federation: SCF）」を組織したように、議会選挙に基づく政治にも積極的に関与していた。こうした政党の主な支持者は、土地のない農村労働者、小作人、労働者であった。テルタムデは、アンベードカルと共産主義者との支持基盤が「絶望的に重なっていた¹²」ために、両者の対立はより鋭くなったと論じている。アンベードカルは、自らの支持基盤であるダリトが共産主義に惹きつけられる可能性を懸念しており、一方の共産主義者からすれば、アンベードカルは支持者を細分化させるやっかいな存在であった。

テルタムデはまた、インド共産党（Communist Party of India: CPI）が1952年3月に採択した、SCFに関する特別決議を紹介している。そこでは、アンベードカルは「親帝国主義者、日和見主義者」だと厳しく非難されている。そして、誤った観念を植え付けられているSCFの民衆をアンベードカルの影響から引き離さなければならないこと、またアンベードカルの見解を積極的に支持していないリーダーをCPIに引き込む必要があること、などを決議している¹³。こうした活動は、明らかにSCFの内部分裂を引き起こそうとするものであった。

アンベードカルが“Buddha or Karl Marx”や“Buddhism and Communism”の中で、仏教と共産主義を融合するのではなく、ことさらに仏教と共産主義を比較し、仏教の優位性を主張した背景には、自らのグループの分裂を防がなければならないという危機感があったのではないかと考えられる。

¹ Babasaheb Ambedkar, “Buddha or Karl Marx,” in Vasant Moon and Hari Narake (eds.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writings and Speeches* Vol. 3, Second Edition, New Delhi: Dr. Ambedkar Foundation Ministry of Social Justice & Empowerment, Govt. of India, 2014, pp. xiv-xv.

² D. C. Ahir, *Selected Speeches of Dr. B. R. Ambedkar (1927-1956)*, New Delhi: Blumoon Books, 1997.

³ Anand Teltumbde, *B. R. Ambedkar India and Communism Introduction by Anand Teltumbde*, New Delhi: Naya Rasta Publishers Pvt. Ltd., 2017.

⁴ 「私有財産の廃止」は、仏教の場合、出家者にのみ適用される項目であって、在家者はその限りではない。それについてアンベードカルがどう考えていたかは、“Buddha or Karl Marx”では明らかではない。しかし“Buddhism and Communism”において、アンベードカルは「私有財産を否定するというサンガのルールを、社会全体にどの程度まで適用できるか」と問いを立て、それは人間社会の都合や状況による、と明確な回答を避けつつも、「理論的には仏教はそれをおこなおうという人を止めることはない」と述べている。Cf. D. C. Ahir, *Selected Speeches of Dr. B. R. Ambedkar (1927-1956)*, New Delhi: Blumoon Books, 1997, p. 138.

⁵ D. C. Ahir, *Selected Speeches of Dr. B. R. Ambedkar (1927-1956)*, New Delhi: Blumoon Books, 1997, p. 137, 粟屋利江「近代から現代へ」『仏教の形成と展開』（奈良康明・下田正弘編、新アジア仏教史2）、佼成出版社、2010年、pp. 369-370。

⁶ Douglas Fairchild Ober, “Reinventing Buddhism: Conversations and Encounters in Modern India, 1839-1956,” Ph.D. Dissertation, University of British Columbia, 2017, p. 285.

⁷ *Ibid.*, p. 292.

⁸ Anand Teltumbde, *B. R. Ambedkar India and Communism Introduction by Anand Teltumbde*, New Delhi: Naya Rasta Publishers Pvt. Ltd., 2017, pp. 22-23.

⁹ *Ibid.*, p. 30.

¹⁰ 「社会主義者」とは書かれているが、その内容を見ると、彼らの主張として「経済的改革が政治的・社会的改革に優先する」、「権力の獲得はプロレタリアートによってなされなければならない」、といったことが挙げられており、共産主義者を指していることがわかる。B. R. アンベードカル「カーストの絶滅」『カーストの絶滅』（B. R. アンベードカル著；山崎元一・吉村玲子訳、明石書店、1994年）所収、pp. 41-47を参照。

¹¹ Anand Teltumbde, *B. R. Ambedkar India and Communism Introduction by Anand Teltumbde*, New Delhi: Naya Rasta Publishers Pvt. Ltd., 2017, pp. 30-31.

¹² *Ibid.*, p. 28.

¹³ *Ibid.*, p. 48.

凡例

1. 底本のインデントは不統一で、アンベードカル自身の文章と引用文との区別が不明瞭であるため、翻訳では適宜改めた。なお引用文は改行してインデントして明確にした。アンベードカルの文章中で引用される場合は「 」で括って表記した。
2. 底本ではアンベードカルの文章と見なしている箇所でも、仏典からの引用と思われる箇所は引用文として扱った。
3. 本文中に明記する必要があると思われる原語については（ ）で括って表記した。
4. 底本に“ ”がない場合でも、翻訳では必要に応じて、適宜「 」で括って表記した。
5. 翻訳にあたって、訳者が補った文章や単語については[]で括って表記した。
6. 底本の頁数は「 」で括って表記した。
7. 底本における誤字脱字の間違いについては、逐一注記せず、適宜修正して翻訳した。
8. 翻訳にあたってのテキスト修正や補足情報については文章末に注記した。
9. 仏教用語解説・引用仏典の紹介は文章末注とは別に「補注」として掲載した。解説のある単語や文章については、頭に*（アスタリスク）を付した。

《翻訳》

ブッダかカール・マルクスか

カール・マルクス (Karl Marx) とブッダ (Buddha) を比較することは、冗談のようにみなされるかもしれない。これは別に驚くことではない。マルクスとブッダの間には、2381年の隔りがある。ブッダは紀元前563年に、カール・マルクスは西暦1818年に生まれた。カール・マルクスは、新しいイデオロギーの政体、すなわち、新しい経済体系を構築した人物とされている。一方、ブッダは、政治や経済とは無縁の宗教の創始者にすぎないと考えられている。このエッセイの表題である「ブッダかカール・マルクスか」は、このように長い時間を隔て、異なる思想分野に従事している2人の人物の比較や対比を示唆しており、きっと奇妙に聞こえるであろう。マルクス主義者 (Marxists) にとっては、マルクスとブッダを同じレベルで扱うこと自体が笑い話になるかもしれない。マルクスは非常に現代的で、ブッダはとても古代的なのだ！ マルクス主義者は、自分たちの師匠に比べて、ブッダは原始的な存在に過ぎないと言うかもしれない。このような2人の間にどんな比較が可能なのか？ マルクス主義者はブッダから何を学ぶことができるのか？ ブッダはマルクス主義者に何を教えることができるのか？ それでもなお、この2つを比較するのは、魅力的かつ有益なのである。両方を読み、彼らのイデオロギーに興味を持ったことは、私を2人の比較へと駆り立てた。もしマルクス主義者が偏見を捨てて、ブッダを研究し、ブッダが何のために立ち上がったのかを理解すれば、彼らの態度はきっと変わるだろうと確信している。もちろん、ブッダを嘲笑しているマルクス主義者たちが、彼を崇拝するまでになることを期待するのは無理である。しかし、「マルクス主義者たちは、ブッダの教えの中に彼らの注目すべき価値があることに気付くだろう」ということだけは言える。

I ブッダの信条

ブッダと言えば、一般的には*アヒンサー (Ahimsa) の教義が連想されよう。それが彼の教えの最も重要で肝要なものだと考えられている。しかし、ブッダが教えたことがアヒンサーをはるかに超えた広大なものであることをほとんどの人は知らない。したがって、まずは彼の信条を詳しく説明する必要がある。私が*三蔵 (Tripitaka) を読んで理解したことを列挙してみよう。

- [442] 1. 宗教は自由な社会に必要である。
- 2. すべての宗教に価値があるとは限らない。
- 3. 宗教は人生の事実に関係するものでなければならず、神や魂や天や地についての理論や憶測に関係するものであってはならない。
- 4. 神を宗教の中心とするのは間違いである。
- 5. 魂の救済を宗教の中心とするのは間違いである。

6. 動物の生け贄を宗教の中心とするのは間違いである。
7. 真の宗教は人間の心の中にあり、*シャーストラ (Shastras) の中にはない。
8. 人間と道徳が宗教の中心でなければならない。そうでなければ、宗教は残酷な迷信である。
9. 道徳が人生の理想であるだけでは十分ではない。神がない以上は、それは人生の法でなければならない。
10. 宗教の役割は、世界を再構築し、幸福にすることであり、その起源や終焉を説明することではない。
11. 世界の不幸は利害関係の対立によるものであり、それを解決する唯一の方法は*八聖道 (Ashtanga Marga) に従うことである。
12. 財産の私有化 (private ownership of property) は、ある階級には権力を、ある階級には悲しみ (sorrow) をもたらす。
13. 社会の利益のためには、その原因を取り除くことによって悲しみを取り除くことが必要である。
14. すべての人間は平等である。
15. 人間の尺度は、生まれではなく、価値である。
16. 大切なのは高い理想であり、高貴な生まれではない。
17. 全ての人に対する*マイトリー (Maitri)、すなわち友好は放棄してはならない。人間は自分の敵にさえそれを負う。
18. 誰にも学ぶ権利がある。学ぶことは、食べ物と同じくらい、人間が生きるために必要なのである。
19. 品性を持たない学びは危険である。
20. 無謬なものはない。永遠に拘束するものもない。あらゆるものは探究と検査の対象である。
21. 最終的なものはない。
22. あらゆるものは因果律の対象である。
23. サナータナ¹⁴、すなわち永久的なものはない。すべてが変化し、あらゆる存在は常に変化している。
24. 戦争は、それが真実と正義のためでない限り、間違いである。
25. 勝者には敗者に対する義務がある。

これがブッダの信条を要約したものである。なんと古いが、なんと新鮮なのだろうか！ 彼の教えは、なんと広く、なんと深いのだろうか！

[443] II カール・マルクスのオリジナルな信条

ここでカール・マルクスが最初に提唱した信条を見てみよう。カール・マルクスは現代社会主義 (modern socialism) あるいは共産主義 (communism) の父であることは疑いようがないが、彼は単なる社会主義の理論を提唱することには関心がなかった。それはマルクスよりもずっと前に他の人によっておこなわれていた。マルクスは自分の社会主義が科学的

であることを証明することに、何よりも関心があった。マルクスの改革運動は、資本家に対するものであると同時に、彼が「ユートピア的社会主義者」(Utopian Socialist)と呼んだ人々に対するものでもあった。彼はその両方を嫌っていた。この点に注意する必要があるのは、マルクスが自身の社会主義の科学的性格を最も重要視していたからである。マルクスが提唱したあらゆる学説には、「自身の社会主義の性格は科学的であり、ユートピア的ではない」という主張を立証すること以外の目的はなかった。

カール・マルクスの科学的社会主義 (scientific socialism) とは、「自身の社会主義の性格は必然的 (inevitable) であって不可避なもの (inescapable) であり、社会はそれに向かって進んでおり、その歩みを妨げるものは何もない」という意味である。この主張を証明するために、マルクスは最大限の努力をしたのである。

マルクスの主張は次のようなテーゼに基づいていた。すなわち

- (i) 哲学の目的は世界を再構築することであって、宇宙の起源を説明することではない。
- (ii) 歴史の流れを形成する力は、主に経済的なものである。
- (iii) 社会は所有者 (owners) と労働者 (workers) の2つの階級に分けられる。
- (iv) この2つの階層の間には、常に階級の対立が起こっている。
- (v) 労働者は、彼らの労働の結果である剰余価値 (surplus value) を悪用する所有者によって搾取されている。
- (vi) この搾取 (exploitation) には、生産手段の国有化、すなわち私有財産の廃止によって終止符を打てる。
- (vii) この搾取が労働者の窮乏をますます増大させている。
- (viii) このような労働者の窮乏の増大は、労働者の中に革命精神をもたらし、階級の対立を階級闘争に転換させている。
- (ix) 労働者の数が所有者の数を上回れば、労働者は国家を占領して、自分たちの支配を確立するに違いない。それをマルクスは「プロレタリアート独裁」(the dictatorship of the proletariat) と呼ぶのである。
- (x) これらの要因は抵抗できないものであり、したがって社会主義は必然である。

マルクス社会主義のオリジナルな基礎を形成した提言を、正しく報告できたことを願う。

[444] III マルクスの信条で生き残ったものは何か？

ブッダとカール・マルクスのイデオロギーを比較する前に、マルクスの信条のオリジナルな言葉 (original corpus) がどれだけ生き残っているかに注目する必要がある。すなわち、どれだけが歴史によって反証され、どれだけが反対派によって破壊されたかについてである。

マルクスの信条は19世紀中頃に提唱された。それ以来、多くの批判を受けてきた。この批判の結果、カール・マルクスによって提起されたイデオロギー構造の多くは粉々に崩壊した。「マルクスの社会主義は必然である」というマルクス主義者の主張が完全に否定されたことは疑う余地もないだろう。社会主義の福音 (gospel) である『資本論』(Das

Capital)¹⁵が出版されてから約70年の歳月を経て、1917年にはじめて一国でプロレタリアート独裁が確立された。共産主義（プロレタリアート独裁の別名）がロシアに入って来た時も、人間の努力なしに必然的に入って来たのではない。共産主義がロシアに踏み入れる前には、革命があり、多くの慎重な計画が数多くの暴力と流血をともなっておこなわれなければならない。世界の他の国々はプロレタリアート独裁の到来をまだ待っている。このように「社会主義は必然である」というマルクスのテーゼに対する一般的な反証以外にも、リストに記載されている他の多くの提言は、論理的にも経験的にも覆されている。今日では誰も、歴史の唯一の説明として、歴史の経済的解釈を受け入れない。誰も、プロレタリアートが徐々に貧困化していったことを受け入れない。彼の他の前提についても同様である。

カール・マルクスに残っているのは、小さいが非常に重要な燃え殻である。私の考えでは、その燃え殻は4つの項目で構成されている。

- (i) 哲学の役割は、世界を再構築することであり、世界の起源を説明することに時間を費やすことではない。
- (ii) 階級と階級の間には利害の対立がある。
- (iii) 財産の私有化は、搾取によって、ある階級には権力を、ある階級には悲しみをもたらす。
- (iv) 社会の利益のためには、私有財産（private property）の廃止によってその悲しみを取り除く必要がある。

IV ブッダとカール・マルクスの比較

生き残ったマルクスの信条の中から要点を取り上げて、今からブッダとカール・マルクスの比較に入る。

1点目については、ブッダとカール・マルクスは完全に一致する。どれほど一致しているかを示すために、ブッダとポッタパーダ（Potthapada）というバラモンとの対話の一部を引用してみよう。

[445] *それから同じ言葉で、ポッタパーダは、次のような一々の問いをブッダに尋ねた。

- 「1. 世界は無常でしょうか？
- 2. 世界は有限でしょうか？
- 3. 世界は無限でしょうか？
- 4. 魂と肉体は同じものでしょうか？
- 5. 魂と肉体は異なるものでしょうか？
- 6. *真実を得た者は死後、生じるのでしょうか？
- 7. 真実を得た者は死後、生じるのでもなく、生じないのでもないのでしょうか？」

そして、どの問いに対しても、尊師は同じ答えをした。それは次の通りである。

「ポッタパーダよ、それも私が意見を述べていない問題である」

28. 「しかし、なぜ尊師はそれに対して意見を述べなかったのでしょうか？」

「(なぜなら、) この問いは、利益のために意図されたものではなく、規範(ダンマ)¹⁶に関係するものでもなく、正しい行動の要素にさえも、厭離、色欲の浄化、静寂、心の寂止、本当の知、(道の高い段階の) 洞察、*涅槃(Nirvana)にもつながらないからである。それゆえ、私はこれに対して意見を述べていないのである」

2 点目については、ブッダとコーサラ(Kosala)国のパセーナディ王(Pasenadi King)との対話からの引用を以下に示す。

*「さらに、王たちの間、貴族たちの間、バラモンたちの間、家長たちの間、母と息子の間、息子と父の間、兄と妹の間、姉と弟の間、仲間と仲間の中で常に争いが起こっています」

これらはパセーナディの言葉であるが、ブッダはこれらが社会の真実の姿を表していることを否定しなかった。

階級の対立闘争(class conflict)に対するブッダ自身の態度としては、八聖道の教義の中で、階級の対立が存在すること、そして階級の対立が悲惨(misery)の原因であることを認めている。

3 点目の問いについては、ブッダとポッタパーダの同じ対話から引用する。

*「では、尊師が定めたことは何ですか？」

「ポッタパーダよ、私は悲しみと困窮が存在することを述べた！ 困窮の根源が何かを述べた。私は困窮の停止とは何かを述べた。私は困窮の停止に到達することのできる方法が何かを述べた¹⁷」

30. 「なぜ尊師はそれについて声明を出されたのですか？」

「なぜなら、ポッタパーダよ、その問いは、利益のために意図されたものであり、ダンマに関するものであり、正しい行動の始まり、^[446] 厭離、色欲の浄化、静寂、心の寂止、本当の知、道の高い段階の洞察、そして涅槃へとつながるからである。それゆえ、ポッタパーダよ、私はそれについて声明を出したのである」

言語は違うが、意味は同じである。困窮に搾取を読み取るなら、ブッダはマルクスから離れていない。

私有財産の問いについては、ブッダと*アーナンダ(Ananda)との対話からの以下の抜粋は非常に示唆に富む。アーナンダの問いに答えてブッダはこう述べる。

*「私は、所有が*貪欲の原因であると言った。さて、それがどのようなものであるか、アーナンダよ、このようにして理解されるべきである。誰かが何かを所有していない場合、何も所有していないので、この所有の停止によって、貪欲の生起はあるだろうか？」

「そうではありません、*世尊(Lord)よ」

「それゆえ、アーナンダよ、まさにそれが貪欲の根拠、基礎、起源、原因であり、すなわち所有なのである」

31. 「私は、執着が所有の原因であると言った。それがどのようなものであるか、アーナンダよ、このようにして理解されるべきである。誰かが何かに対して、いかなる種類の執着も示さなかったとしたら、何かがあったとしても、この執着の停止のために、所有の生起はあるだろうか？」

「そうではありません、世尊よ」

「それゆえ、アーナンダよ、まさにそれが所有の根拠、基礎、起源、原因であり、すなわち執着なのである」

4 点目については、証拠は必要ない。*比丘サンガ (Bhikshu Sangh) の規則が、この問題に関する最高の証言となるであろう。

規則によると、比丘は以下の 8 つの物品についてのみ私有財産として持つことができ、それ以上は持つことができないとされている。その 8 つの物品とは以下の通りである。

1. }
2. } 日常的に着用する 3 枚の衣、あるいは布の断片
3. }
4. 腰用の帯
5. 托鉢用の鉢
6. かみそり
7. 針
8. 水こし器

さらに、比丘は金銀を受け取ることを一切禁じられていた。それは、金や銀で、自分が持つことを許されている 8 つの物の他に何かを買ってしまうことを恐れていたことである。

[147] これらの規則は、ロシアの共産主義に見られたものよりもはるかに厳格なものである。

V 手段

ここでは、その手段について説明する。ブッダが提唱した共産主義をもたらす手段は非常に明確であった。その手段は大きく 3 つに分けられる。

第 1 は、*五戒 (Pancha Silas) の観察にある。

悟りは、彼を苦悩させていた問題解決への鍵を含む新しい福音を生み出した。

その新しい福音の基礎は、世界が困窮と不幸に満ちているという事実である。それは、単に注目されただけではなく、救済の体系の中で何よりも優先されるべきものと見なされた事実であった。この事実の認識が、ブッダの福音の出発点となった。

どんな有益な目的に役立つとしても、この困窮と不幸を取り除くことが彼にとって福音のねらいと対象であった。

この困窮の原因は何なのかを問うたところ、ブッダは 2 つしかないと考えた。

人間の困窮と不幸は人間自身の誤った行為の結果である、ということがそのひとつであった。この困窮の原因を取り除くために、彼は五戒の実践を説いた。

五戒は次の観察からなる：

(1) あらゆる生物を殺傷したり、殺傷させたりしないこと；(2) 盗み、すなわち詐欺または暴力による他人の財産の取得や保持をしないこと；(3) 嘘をつかないこと；(4) 色欲に溺れないこと；(5) アルコール類を飲まないこと。

世界の困窮と不幸は人間の人間に対する不平等さの結果である、ということがブッダの

言うもうひとつであった。この不平等さはどのようにして取り除かれたのか？ 人間の間に対する不平等さを取り除くために、ブッダは八聖道 (Noble Eight-Fold Path) を定めた。八聖道の要素は以下の通りである。

(1) 正しい見解、すなわち迷信からの解放； (2) 知的で真面目な人にふさわしい崇高なる、正しいねらい； (3) 正しい発言、すなわち優しく、隠し事のない、真実 [の発言]； (4) 正しい行為、すなわち、平和的で、誠実で、純粋な [行為]； (5) 正しい生活、すなわち、生き物を怪我させたり傷つけたりすることがない [生活]； (6) 他の7つすべてにおける正しい根気； (7) 正しい瞑想、すなわち注意深く活発な心による [瞑想]； (8) 正しい熟考、すなわち人生の深い謎に関する真剣な考え。

[448] 八聖道のねらいは、地球上に公平な王国を建設し、それによって世界のいたるところから悲しみと不幸を追い払うことである。

福音の第2¹⁸は、涅槃 (Nibbana) の教義である。涅槃の教義は八聖道の教義にとって不可欠な部分である。涅槃がなければ、八聖道の実現は成し遂げられない。

涅槃の教義は、八聖道の実現への道において何が困難であるかを教えてくれる。

これらの困難の主なもの、数えると10ある。ブッダはそれらを10の「*漏」 (Asava)、あるいは「結」 (Fetters)、 「纏」 (Hinderances) と呼んだ。

第1の障害とは、自己の妄想である。人が心の渴望を満足させるとむやみに思っ、あらゆるまがい物を追いかけて、自分自身に完全に夢中になっている限りは、その人に聖なる道はない。計り知れない全体のほんの一部にすぎないという事実に自身の目が開かれた時にはじめて、そして彼が自身の*仮の個我 (temporary individuality) がいかに無常なものであるかを気がついた時にはじめて、彼はこの狭き道にも入ることができる。

第2は疑念とためらいである。存在の偉大な謎、あらゆる個我の無常さに、目が開かれた時、その人は自分の行動に関する疑念とためらいに襲われる可能性が高い。結局のところ、やろうがやるまいが私の個我はすべて無常であるので、どうして何かをするのか、という問いは彼をためらわせ、または行動しないようにする。しかし、それでは人生はうまくいかない。師に従うこと、真実を受け入れること、そして闘争に参加することを決心しなければ、その人は先に進めないであろう。

第3は祭式と儀式的効力への依存である。どんなに良い決意であっても、外的な行為、司祭の権力、聖なる儀式が何らかの援助を与えてくれると信じる祭式主義から脱却しない限り、何にもならない。この障害を克服した時にはじめて、人は「*流れにしっかりと入った」 (fairly entered upon the stream) と言え、遅かれ早かれ勝利を勝ち取る機会がある。

第4は身体的欲情から成る。

第5は他のあらゆる個人に対する悪意である。

第6は物質的な肉体をともなった来世を求める欲望の抑制であり、第7は精神的な世界での来世を求める欲望である。

第8の障害とは、慢心であり、第9の障害とは、独善である。これらは、人が克服するのが最も困難で、すぐれた精神の人が特に陥りやすいものである。自分よりも能力が低く、神聖さの低い者に対する偽善的な侮辱のことである。

[449] 第10の障害とは、無知である。他のすべての困難を乗り越えたとしても、この無知は残る。それは賢明で善良な人にとっての悩みの種であり、人間の最後の敵であり、最

も恐ろしい敵である。

涅槃は、八聖道に従事してこれらの障害を克服したところにある。

八聖道の教義は、人が一生懸命養うべき心の性質を教えてくれる。涅槃の教義は、八聖道に基づくならば、人が真剣に克服すべき誘惑あるいは障害を教えてくれる。

新しい福音の第3¹⁹は、*波羅蜜 (Paramitas) の教義である。波羅蜜の教義は日々の生活の中で 10 の徳目の実践を教え込む。

以下が 10 の徳目である。(1) パンニャー (Panna)、(2) シーラ (Sila)、(3) ネッカ
ンマ (Nekkhamma)、(4) ダーナ (Dana)、(5) ヴィリヤ (Virya)、(6) カンティ
(Khanti)、(7) サッチャ (Succa)、(8) アディッターナ (Aditthana)、(9) メッター
(Metta)、(10) ウペッカー (Upekkha)。

パンニャー、すなわち智慧とは、無明 (Avijja)、*痴 (Moha)、無知の暗闇を取り除く
光のことである。パンニャーは、自分よりも賢明な人に問うことですべての疑念を取り除
き、賢明な人と付き合い、心を発達させるのに役立つさまざまな人文科学や自然科学を修
めることを必要とする。

シーラとは、道徳的な性質、悪をしないという気質、善をおこなうという気質のこ
とであり、間違ったことを恥ずかしく思うことである。罰を恐れて悪をおこなうことを避
けるのがシーラである。シーラは間違いへの恐れを意味する。

ネッカ
ンマとは、世界の楽しみを放棄することである。

ダーナとは、見返りを期待することなく、他人のために自分の所有物、血、手足、さら
には自分の命を施すことを意味する。

ヴィリヤとは、正しい努力のことである。それはあなたが請け負ったことは何でも、決
して引き返さないという考えで自身の全力でおこなうことである。

カンティとは、忍耐のことである。憎しみで憎しみを満たさないことがその本質である。
憎しみは憎しみでは鎮まらないからである。それは忍耐でのみ鎮まるのである。

サッチャとは、真実のことである。ブッダになりたいと願う人は決して嘘をつかない。
彼の話は真実であり、真実以外の何ものでもない。

アディッターナとは、目標を達成する断固とした決意である。

メッターとは、敵も友人も、動物も人間も、すべての存在に及ぶ仲間意識のことである。

ウペッカーとは、無関心と区別される公平さのことである。好きでも嫌いでもない心の
状態である。結果に左右されることなく、それを追求することに従事するのである。

[450] これらの徳目は人が最大限の能力で実践しなければならない。だからこそ、これら
は「波羅蜜」(完全の状態)と呼ばれている。

これが、ブッダが悟りを開いた結果、世界の悲しみと困窮を終わらせるために宣言した
福音である。

ブッダによって採用された手段が、道徳的な性質を変えることによって、自発的に道を行
くように人を回心させることだったのは明らかである。

共産主義者によって採用された手段は、同様に明確で、短く、迅速なものである。それ
らは、(1) 暴力と (2) プロレタリアート独裁である。

共産主義者は、共産主義を確立する手段が 2 つしかないと言う。ひとつは暴力である。
既存のシステムを解体するには、それ以外にはどれも十分ではない。もうひとつは、プロ

レタリアート独裁である。新しいシステムを継続するには、それ以外にはどれも十分ではない。

ブッダとカール・マルクスの類似点と相違点は明らかである。相違は手段についてであり、目的は両者共通である。

VI 手段の評価

ここで手段の評価に目を向ける必要がある。長期的に見て誰の手段が優れていて持続的であるかを問わなければならない。しかしながら、両者の間にはいくつかの誤解がある。それらを解決する必要がある。

暴力について取り上げる。暴力については、それを考えるだけで身震いするような人がたくさんいる。しかし、これは単なる感情に過ぎない。暴力を完全になくすことはできない。非共産主義国でさえ、殺人者は絞首刑になる。絞首刑は暴力ではないのか？ 非共産主義国は非共産主義国と戦争をする。何百万人もの人々が殺される。これは暴力ではないのか？ 国民を殺したために殺人者を殺すことができるなら、敵国に属しているために戦争で兵士を殺すことができるなら、財産所有者が、その所有で他の人類に困窮をもたらすのであれば、なぜ彼を殺すことができないか？ 私有財産を神聖なものとし、財産所有者に有利な例外を設ける理由はない。

ブッダは暴力に反対であった。しかし、彼は正義を重んじ、正義が必要な場合は武力の使用を許可した。これは、*ヴァイシャリー (Vaishali) の最高司令官である*シンハ将軍 (Sinha Senapati) との対話でよく示されている。シンハはブッダがアヒンサーを説いたことを知ったので、彼の下に行って尋ねた。

*「世尊 (Bhagvan) はアヒンサーを説いています。世尊は犯罪者に罰からの解放を与えると説いているのでしょうか？ 世尊は私たちの妻や子供、そして富を守るために戦争に行くべきではないと説いているのでしょうか？ 私たちはアヒンサーの名の下に犯罪者の手で苦しむべきなののでしょうか？」

[451] 「*如来 (Tathagata) は、真実と正義のためにすべての戦争を禁止しているのでしょうか？」

ブッダは答えた。「あなたは私が説いてきたことを誤って理解している。犯罪者は処罰されなければならない、罪のない人は解放されなければならない。犯罪者を処罰する場合、それは治安判事の罪過ではない。罰の原因は犯罪者の罪過である。罰を課す治安判事は法律を施行しているだけである。彼はヒンサー²⁰に染まらない。正義と安全のために戦う人がアヒンサーで非難されることはない。平和を維持するためのすべての手段が失敗した場合、ヒンサー (Himsa) の責任は戦争を開始する人にある。邪悪な権力に屈してはならない。戦争はあるかもしれない。しかし、それは利己的な目的のためであってはならない…」

もちろん、ジョン・デューイ教授²¹が主張したような、暴力に反対する他の根拠もある。「目的が手段を正当化する」というのは道徳的に歪曲された教義であると主張する人を相手にする際に、デューイ教授は、「目的でなくて何が手段を正当化できるか？」と正しく

問いかける。手段を正当化できるのは目的だけである。

ブッダはおそらく手段を正当化するのには目的だけであることを認めただろう。他の何でできるというのか？ そして彼は、もし目的が暴力を正当化するなら、暴力は目的のための正当な手段であると言ったであろう。もし力 (force) がその目的のための唯一の手段であるなら、彼はきっと財産所有者を力から免除しなかつただろう。後述するように、彼の目的のための手段は異なっていた。デューイ教授が指摘したように、暴力は力の使用の別名であり、力は創造的な目的のために使用しなければならないが、エネルギーとしての力の使用と暴力としての力の使用を区別する必要がある。ある目的を達成するためには、その目的と一体化している他の多くの目的を破壊する必要がある。力の使用は、邪悪なものを破壊する際にできるだけ多くの目的を保持するように規制されなければならない。ブッダのアヒンサーは、ジャイナ教の創始者である*マハーヴィーラ (Mahavira) が説いたアヒンサーほど絶対的ではない。彼はエネルギーとしての力しか認めなかつただろう。共産主義者はヒンサー²²を絶対原理として説く。これに対して、ブッダは徹底的に反対した。

独裁に関しては、ブッダはその考えを持たないであろう。彼は民主主義者として生まれ、民主主義者として亡くなった。彼が生きていた当時、14の君主制国家と4の共和制国家があった。彼は*釈迦族 (Sakyas) に属し、釈迦族の王国は共和制国家であった。彼はヴァイシャーリーを非常に愛していた。ヴァイシャーリーは共和制国家であったため、彼の第2の故郷であった。*彼は*般涅槃 (Mahaparinirbhan) の前に*雨安居 (Varshavasa) をヴァイシャーリーで過ごした。雨安居が終了した後、彼はヴァイシャーリーを離れ、いつものように他の場所に行くことにした。少し距離を進んだ後、彼はヴァイシャーリーへと振り返り、アーナンダに言った。[452] 「これは、如来が目にするヴァイシャーリーの最後の眺めです」と。彼はこの共和制国家をとっても気に入っていた。

彼は徹底した平等主義者であった。もともとブッダ自身を含む比丘たち (Bhikkus) は、ぼろ切れで作られた衣を着ていた。この規則は上流階級がサンガに加わるのを防ぐために宣言された。*後に、偉大な医師である*ジーヴァカ (Jeevaka) は、すべてが布で作られた衣を容認するようにブッダを説得した。ブッダはすぐに規則を変更し、すべての僧にそれを広めた。

*かつて*比丘尼 (Bhikkuni) サンガに加わったブッダの養母*マハーパジャーパティー・ゴータミー (Mahaprajapati Gotami) は、ブッダが風邪を引いたと聞いた。彼女はすぐに彼のために襟巻きの用意をした。それをなし終えた後、彼女はブッダのところに行って、彼にそれを身に着けるように頼んだ。しかし彼は、「それが施物であれば、サンガ内の個々人の物ではなく、サンガ全体への施物でなければならない」と言って、それを受け取ることを拒否した。彼女は懇願に懇願を重ねたが、彼は譲渡を拒否した。

比丘サンガには最も民主的な構造があった。ブッダは比丘の一人に過ぎない。内閣の閣僚の中では、せいぜい首相のようなものであった。彼は決して独裁者ではなかった。*彼は生前に2度ほど、サンガを統制するために、その長に誰かを任命するように頼まれた。しかし、彼はそのたびに「ダンマがサンガの最高司令官である」と言って拒否した。彼は独裁者になることを拒否し、独裁者を任命することも拒否したのである。

手段の価値はどうであろうか？ 長期的に見て誰の手段が優れていて持続的であろうか？

共産主義者は、彼らにとって価値ある目的を達成するために、他の価値ある目的を破壊しなかったと言えるだろうか？ 彼らは私有財産を破壊した。これが価値ある目的であると仮定すると、共産主義者はそれを達成する過程で他の価値ある目的を破壊していないと言えるだろうか？ 彼らは目的を達成するために何人の人々を殺したのだろうか。[殺された]人の命に価値はないのだろうか？ 彼らは所有者の命を奪うことなく、財産を奪えなかったのだろうか？

独裁について取り上げる。独裁の目的は、革命を恒久的な革命にすることである。これは価値ある目的である。しかし、共産主義者は、この目的を達成するために、他の価値ある目的を破壊していないと言えるのだろうか？ 独裁は、多くの場合、自由の不在または議会政治の不在として定義される。この2つの解釈では明確にならない。議会政治であっても自由はない。法律は自由の欠如を意味するからである。独裁と議会政治の違いは、以下の点にある。議会政治では、すべての国民は政府によって課せられた自由の制限に対して批判する権利を持っている。議会政治では、あなたに義務と権利がある。[453]つまり、法律に従う義務とそれを批判する権利である。独裁では、従う義務があるだけで、それを批判する権利はない。

VII 誰の手段がより効果的か

さて、私たちは誰の手段がより持続的かを考えなければならない。力による政府か、道徳的性質の政府か、どちらかを選ばなければならない。

バーク²³が述べたように、力は持続的な手段ではあり得ない。アメリカとの和解についての演説の中で、彼は次のような記憶に残る警告を発した。

「最初に申し上げておきますが、力の行使のみでは一時的な解決にしかありません。一時的に鎮圧することはできても、再び鎮圧する必要性がなくなるわけではありせんし、絶え間なく征服されている国民は、統治されているとはいえません。

私の次の反論は、その不確実性です。恐怖は必ずしも力の効果ではないし、武装は勝利というわけではありません。もし成功しなかった場合、方策がなくなってしまうだろう。というのは、和解が失敗した時、力は残りますが、しかし力が失敗した時、それ以上の和解の望みはありません。権力と権威は時として親切心によって買われるが、窮乏し、挫折した暴力によってそれら（権力と権威）が施しとして懇願されることはありません。

力に対するさらなる反論は、対象を維持しようという非常な努力そのものによって、それが損なわれてしまう点です。あなたが戦ったものは、あなたが取り戻したものですが、争いの中で減価し、衰え、無駄になり、消耗されたものでもあります」²⁴

ブッダは比丘たち（Bhikkus）に向けた説教の中で、正義による規律と、法律、すなわち力による規律との相違を示した。

*ブッダは同志たちに話しかけた。

(2) 「同志たちよ、はるか昔、『ストロングタイヤ』という名の主権者たる大君主がいた。彼は正義に基づいて統治する王であり、*四洲（the four quarters of the

earth)の主であり、征服者であり、人々の庇護者であった。彼は天の車輪を持っていた。彼は鞭²⁵や剣によらず、正義によって地上を征服し、この地上の海の境界までの覇権を握っていた。

(3) さて、同志たちよ、ストロングタイヤ王は、何年、何百年、何²⁶千年もの後、ある人に命じて言った。『そなたは見るであろう。おい²⁷、天の車輪が少し沈み、その場所から滑り落ちるのを〔見たならば〕、私に報告しなさい』

何百年もの後、〔天の車輪が〕その場所から滑り落ちた。それを見て、彼はストロングタイヤ王の下に行き、言った。『陛下、どうか真実をお知りください。天の車輪が沈み、その場所から滑り落ちましたことを』

[454] 同志たちよ、そこでストロングタイヤ王は長男である王子を呼び寄せて、こう言った。

『見よ、親愛なる少年よ、私の天の車輪が少し沈み、その場所から滑り落ちてしまった。*転輪王 (a wheel turning King) の天の車輪が沈み、その場所から滑り落ちてしまったら、その王はもう長くは生きられないと言いつたされている。私は人間の快楽を十分に味わった。今や天界の喜びを求める時が来た。さあ、親愛なる少年よ、お前はこの海に囲まれた大地を引き継ぐがよい。私は髪と髭を剃り、黄衣をまとい、家を捨てて出家者になることにしよう』

同志たちよ、そこでストロングタイヤ王は、正式に長男を王位に就かせた後、髪と髭を剃り、黄衣をまとい、家を捨てて出家者となった。しかし王家の仙人が〔家を〕捨ててから7日目に、天の車輪は消えてしまった。

(4) その時、ある人が〔新しい〕王の下に行き、こう言った。『王よ、どうか真実をお知りください。天の車輪が消えましたことを！』

同志たちよ、その時、王は嘆き、悲しみに悩まされた。彼は王家の仙人の下に行き、こう言った。『陛下、どうか真実をお知りください。天の車輪が消えましたことを』

*灌頂を受けた王 (the anointed king) がこう言うと、王家の仙人は答えた。『親愛なるわが子よ、天の車輪が消えたことを嘆いてはならないし、天の車輪が消えたことを悩んでもならない。親愛なるわが子よ、天の車輪は父祖の遺産ではないからである。親愛なるわが子よ、実に、そなたは車輪を転じる人たちにとっての聖なる転じ方で車輪を転じなさい。(世界の真の主権者が自らに課した崇高な義務の理想に向かって行動せよ)。そしてそなたが転輪王にとっての聖なる義務を遂行し、*満月の祭礼 (the feast of the [full] moon) の時に、頭を洗い、最上階のテラスで祭礼を保つと、1000本の輻、外輪、轂、そしてすべての部分を完成した天の車輪が現れる』²⁸

(5) 『陛下、それでは転輪王にとっての聖なる義務とは何でしょうか?』

『それでは、親愛なるわが子よ、そなたは、規範 (真理と正義の法律) に寄り添い、これを敬い、尊敬し、これに敬意を払い、これを神聖化し、自らを規範の旗手、規範の合図者とし、規範を主人とし、自分の民、軍隊、貴族、家臣、バラモンや家長、町や地方の住人、宗教界、そして獣や鳥に対して、正しい見張り、警戒、保護をおこなうべきである。そなたの王国全体で、不正な行為が蔓延しないようにしなさい。また、そなたの王国で貧しい者には誰でも、富が与えられるようにしなさい』

『また、親愛なるわが子よ、そなたの王国において、五感の酩酊から生じる不注意を放棄し、寛容と同情に献身し、それぞれの自己を支配し、自己を落ち着かせ²⁹、自己を完成させた³⁰ような宗教生活を送る人に、そなたは時折問うがよい。[455] 何が善で何が悪なのか、何が犯罪で何が犯罪でないのか、何をすべきで何をすべきでないのか、どのような行動が長い目で見て利益になるのか、それとも災いになるのかについて。そなたは彼らの言うことを聞き、悪を抑止し、善をなすように努めなさい。親愛なるわが子よ、これが世界の主権者にとっての聖なる義務である』

『かしこまりました、陛下』と灌頂を受けた王は答え、主権者たる君主にとっての聖なる義務を果たした。このようにして彼は満月の祭礼の時に、頭を洗い、[祭礼を] 遵守し、最上階のテラスに行くと、1000本の輻、外輪、轂³¹、そしてすべての部分が完成した天の車輪が現れた。これを見た王は、ふと思った。³²『このような機会に天の車輪が完全にひとりで現れるような王は、転輪王になる、と言われている。世界の主権者になれますように』

(6) 同志たちよ、その時、王は座から立ち上がり、一方の肩の衣を肌脱ぎ、左手に水差しを持ち、右手で天の車輪に水を注いで言った。『回転して進め、主たる車輪よ！ 進出して、征服せよ、主たる車輪よ！』

その時、同志たちよ、天の車輪は東の地域に向かって回転して進んだ。これに続いて、転輪王とその軍隊（馬・戦車・象・人）が進んだ。同志たちよ、車輪がどこかに止まると、勝利する將軍たる王は、四軍とともにそこに住まいを定めた。すると、東の地域にいるすべての敵対する王たちが、主権者たる王の下にやって来て言った。『お越してください、大王よ！ ようこそ、大王よ！ すべては貴殿の物です、大王よ！ お導きください、大王よ！』

主権者たる將軍は、こう言った。『汝ら生き物を殺してはならない。汝らは与えられていない物を奪ってはならない。汝らは肉体的欲望のままに間違った行動をしてはならない。汝らは嘘を言ってはならない。汝らは酒を飲んではならない。汝らは自分の所有物を自分がしたいと思うように享受しなさい』

(7) その時、同志たちよ、その天の車輪は東の海に沈み、再び現れ、南の地域に向かって回転して進んだ…。(そして、東で起こったように、すべてが起こったのである)。そして同様に、天の車輪は南の海に沈み、再び現れ、西の地域に向かって回転して進んだ。北でも、南や西で起きたようなことが起こった。

[456] その時、天の車輪は、海の境界まで全土を征服して行くと、王都に戻った。そして転輪王の居室の入り口に近い法廷の前で固定されたかのように停止し、主権者たる王の居室の正面を栄光で照らし出した。

(8) 同志たちよ、第2の王である転輪王もまた…、第3の…、第4の…、第5の…、第6の…、第7の王である勝利する將軍は、何年、何百年、何千年もの後、ある人に命じて言った。『おい、お前は天の車輪が沈み、その場所から滑り落ちるのを見たならば、私に報告しなさい』

『かしこまりました、陛下』とその者は答えた。

その人は、何年、何百年、何千年もの後、天の車輪が沈み、その場所から滑り落ちるのを見た。それを見て彼は、王の下に行き、言った。

その時、その王は（ストロングタイヤ王がしたように）行動した。そして、王家の仙人が〔家を〕捨てて7日目に、天の車輪は消えてしまった。

その時、ある人がやって来て、王に告げた。すると王は車輪が消えたことを嘆き、悲しみに悩まされた。しかし彼は王家の仙人の下に行って、主権者たる將軍にとっての聖なる義務について尋ねようとはしなかった。そして、彼は、自分の考えだけで人々を統治したので、それまでとは異なる統治をされた人々は、主権者たる王にとっての聖なる義務を果たしていた、かつての王の下で繁栄していたようにはならなかった。

その時、同志たちよ、大臣、臣下、財務官、衛兵、門番、そして聖なる詩に生きる者たちが王の下に来て、こう言った。

『王よ、貴殿がご自分の考えで、人々を統治している間は、かつて王が聖なる義務を果たしていた時に施行されていた方法とは異なり、貴殿の民は繁栄しません。いま貴殿の王国には、大臣、臣下、財務官、衛兵、門番、そして聖なる詩に生きる者たちがおり、私たち全員もその他の者たちも、主権者たる王にとっての聖なる義務の知識を有しております。さあ！ 王よ、貴殿はそれについて私たちにお尋ねください。私たちはそれについてお答えいたします』

(9) その時、同志たちよ、王は大臣たちとその他の者たちと一緒に座らせて、主権者たる將軍にとっての聖なる義務について彼らに尋ね、彼らはそれについて教えた。それを聞いた王は、適切な監視と警護をおこなった。しかし貧困者には富を与えず、これがおこなわれなかったので貧困が蔓延した。

[457] 貧困が蔓延すると、ある人が人から与えられていない物を奪った。人はこれを「窃盗」と呼ぶ。民衆はその人を捕まえて王の前に連れて行き、こう言った。『王よ、この者は自分に与えられていない物を奪ったので、これは窃盗になります』そこで、王はその人にこう言った。『おい、お前が、人から与えられていない物を奪って、人が「窃盗」と呼ぶものを犯したことは本当か』

『本当です、王よ』

『なぜだ？』

『王よ、私には生きていくためのものが何もないのです』。すると、王はその人に富を与えて言った。『おい³³、お前はその富によって自分で生活し、両親を養い、子供や妻を養い、仕事を続けなさい』

『かしこまりました、王よ』とその者は答えた。

(10) さて、同志たちよ、また別の人が自分に与えられていない物を盗み取った。民衆はその人を捕まえて王の前に連れて行き、こう言った。『王よ、この者は自分に与えられていない物を盗み取りました』

そして、王は（前の者にしたのと同じように、話し、行動した）。

(11) さて、同志たちよ、人々は、自分に与えられていない物を盗み取った者たちに、王が富を与えていることを聞いた。それを聞いた人々は、『では、私たちも与えられていない物を盗み取ってみよう』と考えた。

さて、ある人がそのように行動した。民衆はその人を捕まえて王の前に連れて行った。王は（前のように）彼になぜ盗んだのかと尋ねた。

『王よ、自分の生活を維持できないからです』

その時、王はこう考えた。『もし、与えられていない物を盗み取った者に、私が富を与えるならば、これによって盗みが増えていくだろう。私は今、この事態に終止符を打ち、その者に厳罰を与え、その首を刎ねよう』

そこで、王は部下たちにこう言った。『さあ、見よ！ 強固な縄でこの者の腕を後ろで縛り、頭を丸め、激しく太鼓を鳴らし、道から道へ、十字路から十字路へ、南門から都の南まで引き回せ。この事態に終止符を打ち、その者に厳罰を与え、その首を刎ねよ』

『かしこまりました、王よ』とその者たちは答え、王の命令を実行した。

(12) さて、同志たちよ、人々は、与えられていない物を盗み取った者がこのようにして死刑にされることを聞いた。それを聞いて彼らはこう考えた。[458] 『私たちも今、自分たちのために鋭利な剣を用意し、与えられていない物を奪い（「窃盗³⁴」と呼ぶ）、その持ち主たちに終止符を打ち、厳罰を与え、その首を刎ねよう』

そして、彼らは鋭利な剣を手に入れ、村や町や都市を略奪しようと繰り出し、大道で強盗を働いた。そして、彼らは、奪った相手の首を刎ねてとどめを刺した。

(13) 同志たちよ、このように、貧困者に物資が与えられなかったために、貧困が蔓延する³⁵。貧困の蔓延から盗みが増え、盗みの拡大から暴力が広まり、暴力の増大から生命の破壊が常態化し³⁶、殺生の頻発から、それらの生物の寿命も容姿も（減少する）。

さて、同志たちよ、後者³⁷の寿命の人の中で、ある人が与えられていない物を盗み取って、他の者と同じように王の前で告発され、盗んだことが事実かどうかを問われた。

『いいえ、王よ。彼らは故意に嘘をついています³⁸』と彼は答えた。

(14) このように、貧困者に物資が与えられなかったために、貧困が蔓延し…、盗みが…、暴力が…、殺生が…、嘘が常態化した。

また、ある人が王に告げて言った。『王よ、これこれの者が与えられていない物を盗み取っていきました』と悪口を言った。

(15) 同志たちよ、このように、貧困者に物資が与えられなかったために、貧困が蔓延し…、盗みが…、暴力が…、殺生が…、嘘が…、悪口が蔓延した。

(16) 嘘から姦通が増大した。

(17) 同志たちよ、このように、貧困者に物資が与えられなかったために、貧困が蔓延し…、盗みが…、暴力が…、殺生が…、嘘が…、悪口³⁹が…不貞行為が蔓延した。

(18) 同志たちよ、（彼らの）中に、近親相姦、ふしだらな強欲、倒錯的な性欲という3つのものが増大した。

そして、このことで母や父への孝行の欠如、聖者への信仰心の欠如、一族の長老への尊重の欠如がたちまちに増大した。

(19) 同志たちよ、このような人間の子孫の寿命が10歳になる時が来るであろう。この寿命の人々の間では、5歳の少女が結婚適齢になる。このような人間の中では、ギー、バター、ゴマの油⁴⁰、砂糖、塩など、これらの種類の味（風味）は消滅するで

あろう。このような人々の間では、クドルーサという穀物⁴¹が最上の食べ物になるだろう。今日の米とカレーが最上の食べ物であるように、その時はクドルーサという穀物が最上の食べ物となるであろう。このような人々の間では、*十善業道 (the ten moral courses of conduct/action) は完全に消失し、*十不善業道 (the ten immoral courses of action) が過度に栄えるであろう。[459] このような人々の間では、道徳という言葉はなく、十善業道は完全に消失し、十不善業道は過度に栄え、このような人々の間では、道徳という言葉はなく、ましてや道徳的な行為者はいないであろう。同志たちよ、このような人々の間では、あたかも今日の孝行な者、信心深い者、一族の長老を尊敬する者たちに敬意と称賛が与えられるように、孝行や信仰心を欠き、一族の長老を尊敬しない者たちに敬意と称賛が与えられるであろう。

(20) 同志たちよ、このような人々の間では、母、母の妹、母の義理の妹、先生の妻、父の義理の妹との (近親婚の妨げとなるような敬虔な思いを抱く) ことはないであろう。世界は、ヤギと羊、鳥と豚、犬とジャッカルのように、乱交状態に陥っているであろう。

同志たちよ、このような人々の間では、母が子に対し、子が父に対し、兄弟が兄弟に対し、兄弟が姉妹に対し、姉妹が兄弟に対して、激しい相互の敵意が日常的になり、激しい悪意、激しい憎悪、殺意さえも抱くようになるだろう。あたかも狩人が獲物を見て感じるように、彼らも感じるであろう」

以上は、道徳的な力が衰え、それが残忍な力に取って代わるとどうなるかを示す最も見事な描写であろう。ブッダが望んだことは、各人が道徳的に訓練されて、彼ら自身が正義の王国のための監視員になることであった。

VIII 国家の衰退

共産主義者自身は、恒久的な独裁としての国家の理論が彼らの政治哲学の弱点であることを認めている。彼らは、国家は最終的に壊滅するという弁明に逃げ込む。彼らが答えなければいけない問いが 2 つある。いつ国家は壊滅するのか？ 国家が壊滅した時、その代わりになるものは何か？ 最初の問いに対して、彼らは明確な時期を示すことはできない。短い期間の独裁は、民主主義を安泰なものにするためには良いかもしれないし、歓迎すべきものかもしれない。独裁はその仕事を終えて、民主主義の歩みを阻むすべての障害と巨石を取り除き、民主主義の道を安泰なものにした後、なぜ自らを清算しないのであろうか。*アショーカ王 (Asoka) がその模範となったのではないか？ 彼はカリング国 (Kalingas) に暴力を行使した。しかし彼はその後、暴力を完全に放棄した。今日の勝者が犠牲者を武装解除するだけでなく、彼ら自身も武装解除すれば、全世界に平和が訪れるであろう。

共産主義者は何も答えていない。いずれにしても、国家が壊滅した時、何がそれにとって代わるかという問いへの満足な答えはない。この問いは、いつ国家が壊滅するかという問いよりも重要である。[460] 無政府状態 (Anarchy) が後を継ぐのであろうか？ もしそうであるならば、共産主義国家の建設は無駄な努力になる。もしそれが力によってしか維持できず、それを保持する力が失われた時に無政府状態に帰着するのならば、共産主義国家

の良さとは何であろうか。

力が失われた後にそれを維持できる唯一のものは、宗教である。しかし共産主義者にとって宗教は嫌忌の的である。彼らの宗教への憎しみは非常に根深いもので、共産主義に役立つ宗教とそうでない宗教とを区別することさえしない。彼らは両者の相違の検証を待たずに、キリスト教への憎しみを仏教に持ち込んでいる。キリスト教に対して向けられた共産主義者の非難は、2点ある。キリスト教に対する彼らの第1の非難は、キリスト教が人々に別の世界観（worldliness）を強制し、世界中の人々を貧困で苦しませたことである。前述箇所の仏教の引用からもわかるように、そのような非難を仏教に向けることはできない。

共産主義者からキリスト教に向けられた第2の非難も、仏教に向けることはできない。この非難とは、「宗教は人々のアヘンである」という主張に要約される。この非難は『聖書』にある「山上の垂訓」（the Sermon on the Mount）⁴²に基づいている。「山上の垂訓」は、貧困と弱さを昇華させる。それは貧しい者と弱い者に天国を約束する。ブッダの教えの中に「山上の垂訓」はない。ブッダの教えは、富を獲得することである。彼の弟子のひとりである*アナータピンディカ（Anathapindika）への説法を以下に示そう。

*ある時、アナータピンディカは、尊師が滞在する場所にやって来た。来訪した彼は、尊師に敬礼し、一方の席に着き、尋ねた。「*覚者は、家長にとって歓迎され、喜ばれ、好ましいが、獲得の困難なことを教えていただけますでしょうか」

覚者は、その問いを聞いて、仰った。「その中で第1は合法的に富を得ることである」

「第2は自分の親族も合法的に富を得るようにすることである」「第3は、長生きをして老齢に達することである」

「事実、家長よ、世界中で歓迎され、喜ばれ、好ましいが、獲得の困難なこれら3つのこと⁴³を達成するためには、4つの前提条件もある。それは、信仰の幸せ、徳行の幸せ、寛容の幸せ、智慧の幸せである。

[461] 徳行の幸せとは、命を奪うこと、盗むこと、不貞を働くこと、嘘をつくこと、発酵酒を飲むことを控えることである。

寛容の幸せとは、家長が、食欲の汚れから解放された心で、寛大で、気前よく、贈り物をするのを喜び、頼まれれば喜んで与え、布施に熱心な生活を送ることである。智慧の幸せはどこにあるのか？ 家長が、強欲、食欲、悪意、怠惰、眠気、放心、動揺に心が支配され、そしてまた悪事に加担し、なすべきことを怠る家長は、それにより幸福と名誉を失うと知ることである。

強欲、食欲、悪意、怠惰、眠気、放心、動揺、疑惑は、心の汚れである。このような心の汚れを取り除いた家長は、大いなる智慧、豊かな智慧、明確な洞察、完全な智慧を獲得する。

このように、合法的かつ正当な方法で富を獲得し、多大な努力で稼ぎ、自らの手で蓄積し、額に汗をかいて獲得することは、大きな幸せである。家長は自分自身を幸福にし、また快活にし、幸福に満ちた状態を保つ。また、自分の両親、妻、子供、使用人、労働者、友人、仲間を幸福にし、また快活にし、幸福に満ちた状態を保つ」

ロシア人は、力が失われた時に、共産主義を維持するための究極の援助としての仏教にはまったく注意を払っていないようである。

ロシア人は自分たちの共産主義を誇りに思っている。しかし彼らは、ブッダがサンガに関する限り、独裁とは関係なしに共産主義を確立したという、すべての驚異の中の驚異を忘れていた。それは非常に規模の小さい共産主義であったかもしれないが、独裁のない共産主義であり、レーニンにはなし得なかった奇跡である。

ブッダの手法は異なっていた。彼の手法は人の心を変えること、つまり人の気質を変えることであった。そうすると、人は何をやるにしても、力や強制によってではなく、自発的に起こる。人の気質を変えるためのブッダの主な手段は、彼のダンマとそのダンマを絶え間なく説くことであった。ブッダの方法は、人々のためになるものであったとしても、人々が嫌がることを強制的にさせるものではなかった。ブッダの方法は、進んでしようとは思わないことを自発的に起こすように、人の気質を変えることであった。

ロシアの共産主義独裁は素晴らしい成果を挙げていると言われる。それは否定することはできない。だからこそ、ロシアの独裁はすべての後進国にとって役立つと私は言うのである。しかし、これは恒久的な独裁のための議論ではない。人類は経済的価値だけでなく、精神的価値も維持しようと望むものである。恒久的な独裁は、精神的価値に注意を払っておらず、またそれを意図しているようでもない。[462] カーライル⁴⁴は、政治経済学を「豚の哲学」(Pig Philosophy)と呼んだ。カーライルはもちろん間違っていた。人には物質的な快適さは必要だからである。しかし、共産主義の哲学も同様に間違っているようである。その哲学の目的が、人を豚同然であるかのように見て、豚を太らせることにあると思われるからである。人は精神的にだけでなく、物質的にも成長しなければならない。社会が新たな基盤を築くことを目指してきたのは、フランス革命の「友愛」「自由」「平等」という3つの言葉に要約される。フランス革命はこのスローガンがあったからこそ歓迎されたが、平等の実現には失敗した。私たちがロシア革命を歓迎するのは、平等の実現を目指しているからである。しかし平等を実現するために、社会が友愛や自由を犠牲にするわけにはいかないことは、いくら強調してもしすぎることはない。平等は、友愛や自由がなければ価値がない。これら3つは、ブッダの道をたどる場合にのみ、共存できるように思われる。共産主義は、ひとつを与えることはできるが、すべてを与えることはできない。

¹⁴ 原文には“Sanatan”とあるが、おそらくサンスクリット語の“saṃtāna”（永続、持続）のことであろう。

¹⁵ 独: *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, 英: *Capital: Critique of Political Economy*.

¹⁶ 原文には“(the Dhamma)”とあるが、“the Norm (the Dhamma)”(リス・デイヴィッツ訳)の誤植と考えられるため、修正して読む。なおリス・デイヴィッツ訳の詳細については「解題」「補注」を参照されたい。

¹⁷ 原文では“misery”になっているが、元となるリス・デイヴィッツ訳は“pain”となっている。これは誤植ではなく、意図的な読み替えと考えられる。

¹⁸ 原文には“The third part of the Gospel ...”とある。本章冒頭の“The means can be decided into three parts”を受けての文章であるが、内容的にはここは2番目にあたるため「第2」に改めて翻訳した。

¹⁹ 原文には“The Fourth Part of the new Gospel ...”とあるが、上と同様、内容的にはここは3番目にあたるため「第3」に改めて翻訳した。

²⁰ 原文には“Ahimsa”とあるが、文脈上合わない。“Himsa”に修正して読む。

²¹ ジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952)。アメリカの哲学者。アンバーダカルは、コロンビア大学の大学院に在学中、彼の影響を強く受ける。

²² 原文には“Ahimsa”とあるが、文脈上合わない。“Himsa”に修正して読む。

²³ エドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1797)。アイルランド生まれのイギリスの政治家、思想家。アメリカ独立運動を支持した人物で、当該の演説は1775年3月22日の“Conciliation with the American

Colonies”であり、アメリカ植民地との和解を主張したものである (cf. *Conciliation with the American Colonies*, Boston: Educational Publishing Company, 1898)。

²⁴ *Ibid.* pp. 31-32.

²⁵ 原文には“courage”とあるが、“scourge” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

²⁶ 原文には“manu”とあるが、“many” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

²⁷ 原文には“Sir”とあるが、下賤な人を呼ぶ言葉である“sirrah” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

²⁸ ここは原文とリス・デイヴィッツ訳で多くの相違が見られる。理解の齟齬が生じる相違部分については網掛けをした。

《原文》

... and on the feast of the moon thou wilt for, with bathed head to keep the feast on the chief upper terrace, to the Celestial Wheel will manifest, itself with its thousand spokes its tyre, navel and all its part complete.

《リス・デイヴィッツ訳》

... and on the feast of the full moon thou wilt go with bathed head to keep the feast on the chief upper terrace, lo! the Celestial Wheel will manifest itself with its thousand spokes, its tyre, navel, and all its parts complete.

原文では意味が通らないため、基本的にはリス・デイヴィッツ訳に基づいて訳した。

²⁹ 原文には“each claiming self”とあるが、“each calming self” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³⁰ 原文には“each protecting self”とあるが、“each perfecting self” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³¹ 原文には“naval”とあるが、“navel” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³² 原文には“is occurred to the king”とあるが、“it occurred to the king” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³³ 原文には“sir”とあるが、“sirrah” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³⁴ 原文には“them”とあるが、“theft” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³⁵ 原文には“grieve”とあるが、“grew” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

³⁶ 原文では“became”が抜けている。

³⁷ リス・デイヴィッツ訳では、直前の文章との間に、「そのため、寿命が八万歳の人間も、その子は寿命が四万歳になった」(pp. 67-68) という一文があるが、原文では省略されている。ここでの“latter” (後者) とは、「人々の寿命が四万歳の時」を指す。

³⁸ リス・デイヴィッツ訳では、「盗人は否認した、彼は故意に嘘をついた」(p. 68) という話だが、原文では、盗人が告発者たちを嘘つき呼ばわりした話に変わっている。ここでは原文にしたがって訳した。

³⁹ 原文では“rvil speaking”とあるが、“evil speaking” (リス・デイヴィッツ訳) の誤植と考えられるため、修正して読む。

⁴⁰ 原文は“oil of tila”とある。“tila”はパーリ語で「ゴマ」のことである。

⁴¹ 原文は“kudrusa grain”とある。“kudrūsa”はパーリ語で穀物の一種のことである。

⁴² 「山上の垂訓 (説教)」は、『新約聖書』の「マタイによる福音書」(第5章、第7章)に見られる説教である。説教の中でイエスは、弟子と群衆たちに8つの「幸いである」という言葉を重ねることで、「神の義」を手にした人物たちの特徴を述べる。なお「ルカによる福音書」にも「平地の説教」(第6章)という同様の説教がある。

⁴³ 原文は“these four things”とあるが、誤植であろう。『ブッダとそのダンマ』の同箇所は、“these three things” (B. R. Ambedkar, “The Buddha and His Dhamma,” in Kumari Selja et al., (eds.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writing and Speeches*, vol. 11, Second Edition. Education Department Government of Mahartashtra, 2014, p. 459) とあるので、それに修正して読む。

⁴⁴ トーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)。スコットランドの評論家、哲学者、歴史家。Pig Philosophy とは、功利主義を揶揄した言葉である。ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) は、道徳あるいは立法の基準として功利性を持ち込み、それぞれの行為から得られる快樂を社会全体で計算しようと試みた。これに対して、カーライルは「生活が快樂より高い目的を持たないことは、まったく卑しく、下等である」と考え、快樂のみを求め、苦を避ける功利主義を「豚の哲学」として批判した。

補注

——用語解説と引用仏典紹介——

凡例

1. 見出し語の次に原語をローマ字表記によって表示した。対応する原語が複数ある場合には、その代表例を掲げた。表示にあたってはパーリ語を優先し、場合によってはサンスクリット語や漢訳を併記した。「Pā」はパーリ語、「Skt」はサンスクリット語、「Chi」は漢訳であることを示す。
2. 取り上げた用語や仏典は翻訳において登場する順で、記載のページ数は翻訳のページ数と対応している。
3. 仏典引用については、はじめに原典中の引用の範囲を示した上で解説を加えている。
4. 仏典引用の解説では、可能な限り原典を示した。原典の指示は、Pali Text Society (PTS) 版に基づいている。

用語解説と引用仏典紹介

p. 9

アヒンサー——Pā. *ahiṃsā*, Skt. *ahiṃsā*. あらゆる生物に対する不殺生・不傷害を意味する。インドの宗教・倫理道德の基調をなす思想。

三蔵——Pā. *tipitaka*, Skt. *tripitaka*. 蔵の原語であるピタカは「かご」の意。仏教のあらゆる文書・教義を蔵するものという意味から、律・経・論の3つを指す。

p. 10

シャーストラ——Skt. *śāstra*. 「シャーストラ」は、サンスクリット語で「論」「学」を意味する。インドにおける諸宗教の書物や学問の名に広く登場する。アンベードカルによるここでの用法は、ヒンドゥー教の典籍を指している。

八聖道——Pā. *ariyāṭṭhaṅgika magga*, Skt. *āryaṣṭāṅgika mārga*. 「八正道」とも書く。理想の境地に達するための8種の実践徳目。8種の正しい生活態度。

- (1) 正しい見解 (Pā. *sammāditṭhi*, Chi. 正見)
- (2) 正しい思考 (Pā. *sammāsaṅkappa*, Chi. 正思惟)
- (3) 正しい言葉 (Pā. *sammāvācā*, Chi. 正語)
- (4) 正しい行為 (Pā. *sammākammanta*, Chi. 正業)
- (5) 正しい生活 (Pā. *sammājīva*, Chi. 正命)
- (6) 正しい努力 (Pā. *sammāvāyāma*, Chi. 正精進)
- (7) 正しい心の落ち着き (Pā. *sammāsati*, Chi. 正念)

(8) 正しい精神統一 (Pā. sammāsamādhī, Chi. 正定)

マイトリ—Pā. mettā, Skt. maitrī. いくつしみ。思いやりの心、ことば、おこない。

p. 12

それから同じ言葉で……私はこれに対して意見を述べていないのである」——長部第 9 経『ポッタパーダ経』 (Dīgha Nikāya 9, Potṭhapāda Suttanta, DN, vol. 1, 178ff) からの引用。この経は、ブッダが、サーヴァティに近い祇園精舎に滞在していた時に、遍歴行者ポッタパーダに説いたものである。アンベードカルが引用した箇所は、「世界は常住であるか」などの十種の問いについて、それらは無益なもの、涅槃のためにならないもの、「解答されないもの」(十無記)であり、これに対して、四諦(苦・集・滅・道)に関わるものこそ有益で、涅槃のためになり、「解答されるもの」であることを説く。T. W. Rhys Davids, trans. *Dialogues of the Buddha*, vol. 1, London: Henry Frowde, Oxford University Press, 1899, pp. 254-255 からの転用。

真実を得た者——如来のこと。詳細は「如来」の項目を参照。

p. 13

涅槃——Pā. nibbāna, Skt. nirvāṇa. 迷いの火を吹き消した状態。さと。最高の理想の境地で、仏道修行の最後の目的。また生命の火が吹き消されたということで入滅、死をいう場合もある。

「さらに、王たちの間……常に争いが起こっています」——中部第 89 経『法尊重経』 (Majjhima Nikāya 89, Dhammacetiya Sutta, MN, vol. 2, 118ff) からの引用。この経では、ブッダがサッカ国のメーダールパという釈迦族の町の園林に住んでいた時、コーサラ国王パセーナディが独りでブッダを訪ねて、仏・法・僧を尊重し称賛したことが説かれる。Lord Chalmers, trans. *Further Dialogues of the Buddha*, vol. 2, London: Pali Text Society, 1927, p. 64 からの転用。

「では、尊師が定めたことは……声明を出したのである」——『ポッタパーダ経』からの引用。T. W. Rhys Davids, trans. *Dialogues of the Buddha*, vol. 1, London: Henry Frowde, Oxford University Press, 1899, p. 255 からの転用。

アーナンダ——Pā., Skt. Ānanda. ブッダのいとことされる。ブッダが帰郷した時に出家し、後にブッダの侍者となりブッダの晩年に常に付き従った。ブッダの説を最も多く聞き、よく質問した。いわゆる十大弟子のひとりとして多聞第一と称せられる。

「私は、食欲は所有が原因であると……すなわち執着なのである」——長部第 15 経『大因縁経』 (Dīgha Nikāya 15, Mahānidāna Suttanta, DN, vol. 2, 55ff) からの引用。この経は、ブッダが、クル国のカンマーサダンマの近くにおいて、侍者のアーナンダに説いたものである。アンベードカルが引用した箇所は、九支縁起中の「渴愛」から、不善の法が生じる縁起を示したものの一部である。T. W. and C. A. F. Rhys Davids, *Dialogues of the Buddha*, vol. 2, London: Oxford University Press, 1910, p. 56 からの転用。

食欲——Pā., Skt. rāga. 財などを貪り求め、飽くことのないこと。非常に欲の深いこと。

世尊——Pā., Skt. Bhagavat. 尊敬されるべき人。世にも尊い人。福德を具えた者。「バガヴァッド」は、古代インドにおいて弟子が師に対して「先生」と呼びかける時の言

葉。仏教ではしばしば固有名詞的に使われ、その場合はブツダを指す。

p. 14

比丘サンガの規則——仏教の出家修行者は、基本的には集団生活を営んでいた。その集まりを「サンガ」(Pā. *saṅgha*, Skt. *saṅgha*. 元は「集まり」や「団体」を意味する)という。出家者のサンガには、男性だけで構成される比丘サンガと、女性だけで構成される比丘尼サンガの2種があった。彼ら出家者が守るべき生活上の規則を、「律」(Pā., Skt. *vinaya*)という。

五戒——Pā. *pañcasīla*, Skt. *pañcaśīla*. 在家の仏教信者が守るべき5つの戒め。

- (1) 生き物の命を奪わないこと (Pā. *pāṇātipātā veramaṇī*, Chi. 不殺生)
- (2) 盗みをしないこと (Pā. *adinnādānā veramaṇī*, Chi. 不偷盜)
- (3) 男女の間を乱さないこと。特に妻以外の女、夫以外の男と交わらないこと (Pā. *kāmesumicchācāra veramaṇī*, Chi. 不邪淫)
- (4) 嘘をつかないこと (Pā. *musāvādā veramaṇī*, Chi. 不妄語)
- (5) 酒を飲まないこと (Pā. *surāmerayamajjapamādatṭhānā veramaṇī*, Chi. 不飲酒)

p. 15

漏——Pā. *āsava*, Skt. *āsrava*. 煩悩を表す術語のひとつ。漏れ出るもの。汚れ。「結」や「纏」とも言われ、しばしば以下の十種で説明される。

- (1) 我はある、我が身はある、という誤った見解 (Pā. *sakkāyadiṭṭhi*, Chi. 有身見)
- (2) 疑い (Pā. *vicikicchā*, Chi. 疑)
- (3) 誤った戒や習慣への執着 (Pā. *sīlabbataparāmāsa*, Chi. 戒禁取)
- (4) 貪り (Pā. *kāmacchando*, Chi. 貪欲)
- (5) 怒り (Pā. *vyāpādo*, Chi. 瞋恚)
- (6) 物質的な世界に対する欲望や執着 (Pā. *rūparāga*, Chi. 色貪)
- (7) 精神的な世界に対する欲望や執着 (Pā. *arūparāga*, Chi. 無色貪)
- (8) 慢心 (Pā. *māna*, Chi. 慢)
- (9) 心のたかぶり (Pā. *uddhacca*, Chi. 掉挙)
- (10) 根本的な無知 (Pā. *avijjā*, Chi. 無明)

仮の個我——バラモン教では普遍的な実体としてのアートマン(個我)を立てる。仏教では、そのような個我を想定せず、人間の個人存在とは諸要素が仮に和合したものと考える。

流れにしっかりと入った——Pā. *sotāpattiṭṭhāna*, Skt. *srotāpattiṭṭhāna*. 聖者としての流れにふみ入った者としての果報。さとりの方角に向かう流れに乗った境地を指す。初期仏教・部派仏教において聖者に至る4段階の第1の果報で、「預流果」という。

p. 16

波羅蜜——Pā., Skt. *pāramitā*. さとりに至るための菩薩の基本的な実践徳目。本文で取り上げられた十波羅蜜は、仏伝などにおいてブツダが前生でおこなったとされる菩薩行である。

- (1) ありのままを洞察する (Pā. paññā, Chi. 慧)
- (2) 戒を守る (Pā. sīla, Chi. 戒)
- (3) 欲を離れる、世俗的世界から離れる (Pā. nekkhamma, Chi. 出離)
- (4) 施しをする (Pā. dāna, Chi. 施)
- (5) 勇猛に努力する (Pā. viriya, Chi. 精進)
- (6) 耐え忍ぶ、怒らない (Pā. khanti, Chi. 忍辱)
- (7) 真実のみを語る (Pā. sacca, Chi. 諦)
- (8) さとりに向けて心が揺るがない (Pā. adhiṭṭhāna, Chi. 決定)
- (9) 慈しみの心を持つ (Pā. mettā, Chi. 慈)
- (10) 苦楽に対し平静をたもつ、執着しない (Pā. upekkhā, Chi. 捨)

痴——Pā., Skt. moha. 物の道理をわからないこと。迷い。愚痴。無知。

p. 17

ヴァイシャーリー——Pā. Vesālī, Skt. Vaiśālī. 古代インドの十六大国のひとつヴェッヅ国内にあった都市。現在のビハール州内にある。いわゆる「第二結集」がおこなわれた地として知られる。

シンハ將軍——ヴァイシャーリーの將軍で、シーハー (Sīhā) 比丘尼の兄。はじめはジャイナ教の信者であったが、ブッダのもとへ行き、説法を聞いて在家信者となる。

「世尊 (Bhagvan) はアヒンサーを……利己的な目的のためであってはならない…」——出典不明。ただ類似する内容が *The Buddha and his Dhamma* の “Book VI. He and his Contemporaries, Part III. Critics of his Doctrines, § 3. Critics of the Doctrine of Ahimsa” に確認される (B. R. Ambedkar, “The Buddha and his Dhamma,” in Kumari Selja et al., (eds.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writing and Speeches*, vol. 11, Second Edition. Education Department Government of Maharashtra, 2014, pp. 508-509)。これについてはポール・ケーラスの *The Gospel of Buddha* の “LI. Simha’s Question Concerning Annihilation” の 14~16 からの転用であることがわかった (Paul Carus, *The Gospel of Buddha: According to Old Records*, Chicago: Open Court Publishing Co, 1984, pp. 126-127)。 *The Gospel of Buddha* の “Table of Reference” を確認すると、14 は律蔵の「小品」 (Mahāvagga, vi, 31) が出典であり、15 と 16 の出典はなく、説明的加筆 (explanatory addition) であると明記されている (*ibid.* p. 237)。

如来——Pā., Skt. Tathāgata. 真理の体現者のこと。仏教だけでなく、当時のインドの一般諸宗教でも使われていた呼称である。後にもっぱらブッダの呼称となり、さらに大乘仏教では諸仏の呼称となった。アンベードカルの文脈では、ブッダを指している。

p. 18

マハーヴィーラ——Skt. Mahāvīra. インドのジャイナ教の開祖、ヴァルダマーナに対する尊称。「大勇者」を意味する語。ブッダと同時代の人と考えられる。バラモン教を批判して極端な不殺生主義と厳しい戒を定め、人生を苦とみて魂の救済を説いた。ジナ (勝者) とも呼ばれる。

釈迦族——Pā. Śākya, Skt. Śākya. 古代北インドの部族。ブッダがこの部族の王族の子とし

て生れたことで知られる。釈迦族は現在のネパールとの国境付近、ヒマラヤ山麓のカピラワットゥを中心として国を建てていたが、ブッダの晩年にコーサラ国によって滅ぼされたという。

彼は般涅槃 (Mahāparinirbbaṇa) の前に……ヴァイシャーリーの最後の眺めです」と。——ブッダの最晩年の旅とブッダの入滅、火葬、遺骨分配の様子を伝える、長部第 16 経『大般涅槃経』 (*Dīgha Nikāya* 16, *Mahāparinibbāna Suttanta*, DN, vol. 2, 72ff) に基づく。この一節は、ブッダが生涯で最後にヴァイシャーリーの街を去る時に「象が眺めるように身をひるがえして」述べたという、よく知られた言葉。

般涅槃——Pā. parinibbāna, Skt. parinirvāṇa. [ブッダの] 偉大なる死。またすぐれて完全なさとの境地をいう。「涅槃」の語はさとの境地を指すことが多く、「般涅槃」はブッダの偉大なる死を指すことが多い。

雨安居——Pā. vassāvāsa, Skt. varṣās varṣavasāna. インドの仏教徒は、雨季の間、外出すると草木・小虫を知らずに踏み殺すおそれがあるとして、洞窟や寺院に籠って修行に専念した。これを「雨安居」という。

後に、偉大な医師である……すべての僧にそれを広めた。——このエピソードは、律蔵の「衣韃度」 (*Vinaya Piṭaka*, *Cīvarak khandhaka*, VP, vol. 1, 280) に基づく。

ジーヴァカ——Pā., Skt. Jīvaka, Chi. 耆婆. ブッダ時代の名医として知られる。マガダ国の首都王舎城に住んでいた医師。

かつて比丘尼 (Bhikkuni) サンガに……彼は譲渡を拒否した。——このエピソードは、中部第 142 経『施分別経』 (*Majjhima Nikāya* 142, *Dakkhiṇavibhaṅga Sutta*, MN, vol. 3, 253ff) に基づく。

比丘尼サンガ——女性出家者 (Pā. Bhikkunī) の集団。「比丘サンガの規則」参照。

マハーパジャーパティ・ゴータミー——Pā. Mahāpajāpatī Gotamī, Skt. Mahāprajāpatī Gautamī. ブッダの叔母で養母。姉はブッダの母、マーヤーであり、マーヤーの死後スッドーナ王に嫁いでナンダらを生む。ゴータマ・シッダッタ (後のブッダ) を赤児の時から養育した。ブッダが帰郷した時に、釈迦族の女性たちとともに出家を乞う。アーナンダのとりなしで出家を認められ、これが比丘尼、つまり女性出家者の端緒となる。

彼は生前に 2 度ほど……と言って拒否した。——出典不明。ただ内容的に長部 16 経『大般涅槃経』 (*Dīgha Nikāya* 26, *Mahāparinibbāna Suttanta*) の有名な「師の握拳」や「自灯明法灯明」 (DN, vol. 2, 100-101) に基づいて創作された可能性も考えられる。ブッダはアーナンダに、自身には「私が比丘サンガを導く」や「比丘サンガが私に頼っている」という思いはないことを告げ、また自身の死後には、修行者自らと法 (ダンマ) をよりどころとすべきことを述べる。

p. 19

ブッダは同志たちに話しかけた……狩人が獲物を見て感じるように、彼らも感じるであろう。——長部第 26 経『転輪王獅子吼経』 (*Dīgha Nikāya* 26, *Cakkavatti Sīhanāda Suttanta*, DN, vol. 3, 58ff) に基づく。この経は、ブッダがマトゥラーの近くに住んでいた時に、比丘たちに説いたもので、善の功德とは何かを、世間的なものと同世間

的なものの2種によって明らかにしている。本論に引用されたのは、前者のうち、
転輪王のあり方を示した部分である。王が転輪王としての聖なる義務を果たす間は
領土も人々も安泰であるが、そこから外れた時には領土や人々の心が次第に荒廃す
ることを説く。T. W. and C. A. F. Rhys Davids, trans. *Dialogues of the Buddham* vol. 3,
London: Oxford University Press, 1921, pp. 59-71 からの転用。

四洲——Pā. cattāro dvīpā, Skt. catur dvīpa. 古代インドの世界観において、世界の中心であ
る須弥山の四方の海にある四大洲。四洲で全世界を表す。南方の南瞻部洲は「閻浮
提」ともいい、我々の住む所である。

p. 20

転輪王——Pā. cakkavatti, Skt. cakravartin. 「統治の輪を転じる聖なる王」の意味。インド
における偉大な理想的統治者のこと。武力によらず正義（ダルマ）によって征服・
支配すると言われている。

灌頂を受けた——Pā. avasiṭṭha, Skt. avasiṣṭa. 頭に水を灌ぎかけること。インドの国王の即
位や立太子の時におこなった儀式。四大海の水を頭頂に注ぎ、祝意を表した。

満月の祭礼——片山一良の翻訳では、ここは「布薩」と訳されている。布薩の原語は、
Pā. Upostha. 仏教教団の定期集会。同一地域の僧が集まって自己反省し、罪を告白
懺悔する集まり。片山一良訳『長部（ディーガニカーヤ）パーティカ篇 I』大蔵出
版、2005年、pp. 130-131 を参照。

p. 24

十善業道——Pā. dasakusalāni, Skt. daśa kuśalakarmapatha. 10種の善いおこない。十不善業
道（十悪）の対。十不善業道をおこなわないこと。

- (1) 生き物の命を奪わないこと (Pā. pāṇātipātā veramaṇī, Chi. 不殺生)
- (2) 盗みをしないこと (Pā. adinnādānā veramaṇī, Chi. 不偷盜)
- (3) 男女の間を乱さないこと。特に妻以外の女、夫以外の男と交わらないこと
(Pā. kāmesumicchācāra veramaṇī, Chi. 不邪淫)
- (4) 嘘をつかないこと (Pā. musāvādā veramaṇī, Chi. 不妄語)
- (5) 粗暴な言葉を使わないこと (Pā. pharusāvācāya veramaṇī, Chi. 不惡口)
- (6) 人の仲をさくような言葉を使わないこと (Pā. piṣuṇāvācāya veramaṇī, Chi. 不兩
舌)
- (7) 意味のない、無益なおしゃべりをしないこと (Pā. samphappalāpā veramaṇī, Chi.
不綺語)
- (8) 食らないこと (Pā. anabhijjhā, Chi. 無貪)
- (9) 怒りの心をいだかないこと (Pā. avyāpāda, Chi. 無瞋)
- (10) 正しい見解を持つこと (Pā. sammāditṭhi, Chi. 正見)

十不善業道——「十悪」とも。十善業道の対。「十善業道」を参照。

アショーカ王——Pā. Asoka, Skt. Aśoka, Chi. 阿育王。インド最初の統一国家であるマウリ
ヤ王朝の第三代の君主。彼はインド亜大陸のほぼ全域を統一した。戦争の悲惨さを
目の当たりにし、罪のない人々を殺傷したことを深く恥じて、熱心な宗教家となり、

ダルマによる政治の理想を掲げた。

p. 25

アナータピンディカ——Pā. Anātapinḍika, Skt. Anāthapiṇḍada. サーヴァティ (Chi. 舍衛城) のヴァイシャ出身の長者。身寄りの無い者たちに食事の施していたことから、「アナータピンディカ」(Chi. 給孤独) と呼ばれる。本名は「スダッタ」(Pā. Sudatta, Chi. 須達多) という。ブッダに出会い、在家の信者となる。ブッダにサーヴァティへの教化を願い、その地に帰って祇園精舎を建て、ブッダを迎える。

ある時、アナータピンディカは……幸福に満ちた状態を保つ」——出典不明。同じ文章が *The Buddha and his Dhamma* の “Book V. The Buddha and His Predecessors, Part V. Vinaya for the Laity, § 1. Vinaya for the Wealthy” に確認される (B. R. Ambedkar, “The Buddha and his Dhamma,” in Kumari Selja et al (eds.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writing and Speeches*, vol. 11, Second Edition. Education Department Government of Maharashtra, 2014, p. 459)。しかし巻末の出典一覧 (Vasant Moon, (ed.), “Pali and Other Sources of ‘The Buddha and His Dhamma’,” in *Dr. Babasaheb Ambedkar Writing and Speeches*, vol. 11, Second Edition. Education Department Government of Maharashtra, 2014, p. 20) には、この箇所への言及はない。

覚者——Pā., Skt. Buddha. 目覚めた人。真理に目覚め、他を目覚めさせる人。元はインドの宗教一般において、すぐれた修行者や聖者に対する呼称であったが、しばしば固有名詞的に使われ、その場合はブッダを指す。

RINDAS Series of Working Papers by Integrated Area Studies on South Asia,
National Institutes for the Humanities

National Institutes for the Humanities (NIHU)

<https://www.nihu.jp/ja/research/pj-s-asia>

Integrated Area Studies on South Asia (INDAS-South Asia)

<http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

The Center for South Asian Studies, Ryukoku University (RINDAS)

RINDAS Series of Working Papers 35

B. R. アンベードカル “Buddha or Karl Marx” の翻訳

翻訳者：川元恵史・嵩宣也・壬生泰紀

2022年3月発行 非売品

発行 龍谷大学南アジア研究センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

龍谷大学深草キャンパス 至心館455

TEL：075-645-8446 FAX：075-645-2240

印刷 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町677-2

TEL：075-343-0006

ISBN 978-4-904945-76-6

ISBN 978-4-904945-76-6